

文化・芸術

「花篝（はなかがり）」

1978年ころ、紙本彩色
Mコレクション

加山又造 (1927～2004年)

暗闇の中、燃え上がる炎によって照らし出される桜。花をささえる「かく」の部分が、炎に呼応するように、赤く色づいています。桜のみなぐる生命力を感じさせます。

加山又造は京都市の西陣の衣装図案家に生まれ、17歳で上京、東京美術学校に入学します。

1951年に東京国立博物館で同時に開催された「アンリ・マチス展」と「宗達光琳派展覧会」を見て、日本の伝統絵画の可能性を再発見し、尾形光琳の描く水流表現にも大きな関心を持ち、表現方法の研究を重ねました。その成果を自らの作品にも反映させています。本作の炎の火の粉が燃え上がる描写にも、渦をまく表現が見取れます。

大川美術館は27日まで展示替えのため休館しています。翌28日からは本作を中心とした「春」をテーマとした特集展示、ならびに常設展示をご覧いただけます。当館が立つ水道山には、桜が咲き始めました。美術館内外で春の息吹をお楽しみください。
(池田)

名画の扉

大川美術館特集展示から

